

SYŌNEN SYŌZYO

Sekai Bungaku Jemoyū



八犬伝 滝沢馬琴

東海道中膝栗毛 十返舎一九

雨月物語 上田秋成

ほか3編

少男少女

世界文学全集

東洋編(3)

三 国 志

羅 貫 中 作・伊藤貴麿 訳

水 滸 伝

施 耐庵 作・村上知行 訳

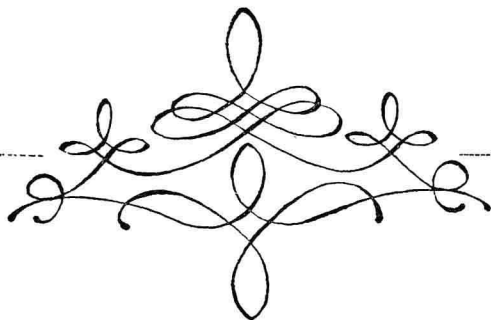
聊 斎 志 異

蒲 松 齡 作・小田嶽夫 訳

ほか 1 編

講 談 社

43



少年少女世界文学全集43
東 洋 編 第 3 卷

N. D. C. 923

講談社 昭和34

430p 23cm

昭和34年 8 月20日発行

訳 者 ^{いとうたかまろ}伊藤貴磨・^{むらかみともゆき}村上知行

発 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

発行所 東京都文京区音羽町 3ノ19 株式会社 講 談 社

振替口座東京 3930 電話大塚 (94) 大代表 3111

印 刷 大日本印刷 | 背 皮 厚川株式会社

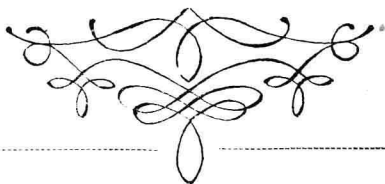
製 本 大 進 堂 | クロス 日本クロス

本文用紙 本州製紙

定価 380円

© 伊藤貴磨・村上知行 昭和34年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします



PRINTED IN JAPAN

目 次

少年
少女

世界文学全集

第 43 卷
東洋編第 3 卷

三 国 志

羅貫中作
伊藤貴麿訳 9

一	黄巾の賊	11
二	桃園のちかい	13
三	むだばねおり	16
四	むかしの師	17
五	漢の王室と暴雄董卓	21
六	長安への遷都	28
七	曹操実権をにぎる	30
八	許田の巻き狩	34
九	血書の密詔	38
十	大魚海に入る	40
十一	関羽の三条件	43
十二	関羽、袁詔の二将をきる	50
十三	関羽、五関に六将をきる	54
十四	三人の再会	60
十五	劉備、荊州の劉表をたのむ	66

大	名馬的盧の功	74
七	水鏡先生	76
大	劉備、三たび草のいおりをおとずれる	83
九	孔明の火ぜめの計	88
三	長坂坡の敗走戦	93
三	趙雲、単騎幼主をすくう	95
三	八十万の大軍をにらみかえす	101
三	孔明、呉に使いする	104
三	周瑜のはらのうち	108
三	一夜に十万の矢を	112
二	鳳雛（龐統）の連環のはかりごと	115
二	孔明、七星壇に風をいのる	119
二	百万の軍も総くずれ	122
二	蜀への進軍	128
三	鳳雛の討ち死に	132
三	ついに蜀の平定なる	135
三	漢中の併合	139

水

澁

伝

施耐庵作
村上知行訳

三三 関羽の討ち死に……………145

三四 曹操の死、曹丕帝位をうばう……………152

三五 劉備帝位につき、呉を討つ……………154

三六 猇亭の大敗と蜀帝の死……………158

三七 孔明、南蛮を討つ……………163

三八 四つの毒のいずみ……………169

三九 孔明、いよいよ政魏の軍をおこす……………175

四十 孔明、ないて馬譚をきる……………178

四一 くりかえす攻防戦……………182

四二 決死の出陣……………185

四三 将星は落つ五丈原……………188

一 伏魔殿からとびだした百八つの金の光はどこへいったのか……………199

二 ひょうしぎが高らかになって、山賊らが史家村をおそう……………203

三 秋のお月見の夜、やしきをとりに来たいまつの火の海……………206

四 「関西のおとのさま」が、じつは、ぶた殺しの肉屋のおやじであった……………210

- 五 滑州の町をわきかえらせた魯達は、はたしてどこへにげたのか……………213
- 六 六十二斤のはがねの禅杖をひきつけて、天下をあるくあらくれぼうず……………217
- 七 天下にはおそろしいばけものがいて、魯智深があわや大しくじり……………221
- 八 ならずものがよりあつまつて、ちえをしぼった大計略はどういうことか……………224
- 九 豹子頭の林冲がげんこつはふりあげたが、ふりおろせない……………228
- 十 高俅のおやしきのおくで、こっそりわるだくみがすすめられる……………232
- 十一 ぬれぎぬをきせられた林冲が、首かせ、くさりにつなされる……………236
- 十二 血まみれの足をひきずりながら野猪林へはいっていけば……………240
- 十三 「これを見よ」と、林冲がゆびさしてみせた顔のいれずみ……………244
- 十四 まぐさおきばのやぶれ小屋で大雪の日に林冲がひとりごと……………247
- 十五 あわや火あぶりをのがれた師範が、やりをとつてかけだせば……………251
- 十六 梁山泊へたずねていった豹子頭が、なにかまいりをことわられる……………254
- 十七 都のさかりばで、まつびるま、毛なしのとらがよつぱらつてあはれる……………258
- 十八 しずかな入り江の村のりようしだが、義侠にあつい三人兄弟……………262
- 十九 こいがほしいとはまっかなうそ、呉用は大しごとをもちこんできた……………265
- 二十 大名府から都までのとちゆうには、おそろしいところが多かつた……………269
- 二十一 らんらんともえる太陽のま下、焼け石の道をすすむ人々……………272

- 二三 とうげのむこうから、「へへ、のんきだね。」と、歌の聲がきこえる……………275
- 二三 鄆城の町をくりだしたおおぜいのとりてらのゆくさはどこだったか……………280
- 三四 晁蓋が梁山泊のかしらとなつて、てがみと金を宋江におくる……………283
- 三五 「三ばいのんだら、おかをこえるな。」と、きみような居酒屋の旗のもんく……………287
- 二六 景陽岡のとうげに日がくれて、木の葉をならす風の音がする……………290
- 二七 世にまたとない神力——とらの頭をおさえつけて足で殺す……………294
- 二八 猛州道の十文字坂で、武松がしびれぐすりをのまされる……………298
- 二九 しんとふけた夜なかに夜なきをする、行者がのこしたかたみの刀……………302
- 三〇 快活林でふんだりけったりされ、蔣門神が青ざめておぼけのよう……………305
- 三一 飛雲浦の岸のすなを血にそめて、武松ははたしてどこへ行く……………309
- 三二 「おしどりの間」でかたきをうち、白かべに血の文字を書きのこす……………312
- 三三 とうげの居酒屋で、宋江があわやねむりぐすりのさいなんにあう……………316
- 三四 たすけられた目の前に、思いがけないなんぎがふつてかかる……………320
- 三五 潯陽江の川の水に星がうつつて、宋江らの命があぶない……………323
- 三六 江州の「蔡九さま」が、きわめてかたんに首実験をすまず……………327
- 三七 えんとつのすすをかぶったような、まっ黒けのいなかもの……………331
- 三八 白いのと黒いのが、青い水の中でパチャパチャの大たちまわり……………334

三十九 よつばらって、おだやかでないむほんの詩をかべに書きのこす……………338

四十 かみをふりみだし、きものをひきさいて、宋江がにせきちがいとなる……………342

四十一 にせてがみのたくらみのわけのかわが、どうしてはげることになったか……………346

四十二 じしんと火事と大風とが、いつときにおきたかのように……………349

四十三 川の水をまっかにそめて、はんぼんもえあがつた夜討ちの火ばしら……………353

四十四 ひろい天下におどりだした季遠が、滄州へおつばらわれていく……………357

四十五 百八つの星がおりてきて、百八人のごうけつとなる……………359

琴の音のちぎり……………抱養老人編
伊藤貴麿訳……………361

聊齋志異……………蒲松齡作
小田嶽夫訳……………381

一 ある兄弟の話……………383

二 趙城のとら……………390

三 きくのきようだい……………392

四 こおろぎ合わせ……………400

五 ふしぎな道……………406

六 王六郎……………408

セへびつかい

解説

訳

者

413

読書指導研究会

読書指導

滑川

道夫

424

今村秀夫

装本 池田仙三郎

さしえ 鴨下晁湖

福田貂太郎

山崎百々雄

池田仙三郎

三 国 志

ら
羅
い
伊

かん
貫
とう
藤

かん
貫
たか
貴

ちゅう
中
まろ
麿

さく
作
やく
訳



三 国 志

中国に、「男は『三国志』をよむな。女は『西廂記』をよむな。」という、ことわざがあります。

について

「西廂記」のことはしばらくおきまして、「三国志」を男がよんではいけないというのは、——作中の人々が、変に応じ、機に応じ、あまりにも多く、はかりごと、策略、手段などをもちいるから、それをよむものはかしこくなりすぎる、つまり、わるがしこくなるからだということです。

しかしこれは、中国のむかしでも、頭のこちこちの学者先生がいったことで、みなさん、そんなことはありませんね。

どうぞ、「三国志」をどしどしよんで、みなさんはかしこくなってください。

いま 中国の大立物の毛沢東先生も、小さいときはいたずらっ子で、学校の教室のつくえの下にかくして、この「三国志」をよんだそうです。

そして大きくなってから、どういったかということ、実社会では、教科書よりも「三国志」のほうがおおいに役にたった、ですって。

(伊 藤 貴 磨)

一 黄巾の賊

いったい天下の大勢は、わかれてひさしくなればかならず合し、合してひさしくなれば、かならずまたわかれるのがつねである。——こういうふうにして中国の歴史は、数千年のあいだ、流転してきたのである——。

むかし漢といった時代に、前漢と後漢とがあったが、その後漢も十二代とつづいて、靈帝がみ位についたとき（西暦一八四年）には、もはやその王朝のいしずえもゆるぎ、まつりごとともみだれきつて、天下の人心は、いまにも大乱がおこるのではないかと、生きたこころもなかつた。

こうしたとき、鉅鹿郡（今の河北省南）に張角というインテリがあり、国家しけんで秀才の資格までとつたが、官吏になるしけんらしくないで、くさつていた。

世の中に不正がおこなわれ、政府のしけんの成績まで金しだい時代ともなると、らくだいな生などで、よくやけにな

り、憤然として、一思いに妖術使いや山賊になるものがあつた。この張角もそのたぐいで、かれはあるとき、とつぜんこんなことをいいふらしはじめた——。

かれが薬草をとり山へわけ入ると、ひとりの老翁にあつた。老翁はかれを、おくふかいほらあなにみちびいて、三巻のまきものをさずけて、こういったというのである。

「これはとうとい天書であつて、『太平要術』と名づけるものである。なんじはよくこの書をよみならつて、つねに道をおこない、善をほどこし、天にかわつてあまねく天下の人々をすくうがよいぞ。」

張角がその名をたずねると、

「われこそは南華老仙である。」

老翁はこうこたえたかと思うと、一じんのかぐわしい風と散じて、そのすがたをかきけしてしまつた。

南華老仙というのは、ゆうめいな莊子というむかしの大学者のことである……。

まず以上のようなふれこみで、張角が世の中をたぶらかそうとしているとき、おりもおりとて天下にわるいはやりやまゝいが流行して、ばたりばたりと死人があいついで出だした。



そこで張角は、おふだやら、お水やらをくぼつて、愚民のあいだにひょうばんをとり、やがてみずから太平道人、大賢良師と称して、たちまち五百人の信者をえてしまった。

ついで張角は、五百人を天下の諸州につかわして、じぶんのいかさま宗教をせんでんさせた。

すると、乱をのぞんでいた一般の民衆は、たちまち張角の信者となつて、ほうぼうに、数千から一万名にもおよぶ、い

わば反政府的な農民軍団を、合計三十六軍もつくつてしまつた。

こうなつてくると、らくだい書生の野望も、だんだんふくらまざるをえない。

「世の中は、あんがいあまいものだ。このぶんなら、むざうさに天下がとれるぞ。」

とうそぶいた。

張角はふたりの弟とそうだんして、ひそかに黄旗（天子）をつくつて、むほんのじゅんぴをはじめた。と、朝廷のほうでも、ようやくこれをかぎつけて、討つ手をさしむけることとなつた。

ことのあらわれたのを知つた張角らは、

「よし、それならこつちから先手をうってやるぞ。」

と、いそいで兵をあげて、

「いまや漢の運命もすでにつき、大聖人あらわれたり。なんじらみな、よろしく天にしたがつて太平をたのしめ。」

ととなえると、たちまち四方より、四、五十万もの土民が、黄色い布で頭をつつんで、それを申しあわせのしるしとし、はせさんじてきた。中国の歴史でゆうめいな、「黄巾の乱」

というのがこれである。そこで朝廷からは、三人の將軍をつかわして、三方面から討伐させることとなった。

その張角の一軍が、幽州のさかいまでせまつたとき、幽州の太守（長官）であつた劉焉は、諸方にたてふだをたてて義兵をつのることにした。そしてそのたてふだが、州内の涿郡（今の河北省の涿県）にもたてられたとき、はからずも、ここに三人の風雲児を、さそいだすこととなつたのである。

二 桃園のちかい

涿郡の城下から、東南十二里（中国の一里は、やく三分の二キロメートル）の郊外の、のどかな楼桑村の村はずれにも、そのたてふだの一本がたてられていた。

そこへ、身のたけが八尺（やく二メートル）もあり、両方の耳はかたまでたれて、よく見ればじぶんの目でそれが見え、左右の手はひざのくるぶしにもとどく、一見異様な人物がやつてきて、そのたてふだをよんでいた。

この男は姓を劉、名を備、よび名を玄德といったが、早くから父をうしない、現在は、わらじを売つたり、むしろをおつたりして、ようやくくらしをたてていた。

劉備は、しばらくたてふだをながめていたが、

「あ、ああ。」

と、はらのそこらなげくように、ふといためいきをついた。——というのは、かれは漢の王室の血をひいていたから、いっそう漢の見るかげもないおとろえかたをなげき、しかも現在のじぶんの微力さが、ざんねんだつたのであらう。やがて劉備が、たちさろうとしていると、ふいにうしろから、いかずちのような声でよびとめたものがあつた。

「おい。大丈夫たるものが、こういうときに国につくそうとはせず、めめしくもためいきをつくとは、なにごとか。」

ふりかえつてみると、身のたけ八尺、ふとい首の上にのつた大きな頭、ぎろつとした目、とらのようなひげで、いきりたつたうまのように、おつそろしく勇猛そうな男である。

——ここでちよつとことわっておくが、身のたけ八尺とか、九尺（七十七センチ）とかいっても、いまの日本の尺度とはちがうから、わりびいて考へてもらわなければならない。

さて、劉備がひきかえて、あいての姓名をたずねると、

「おれか。おれは張飛、よび名を翼徳というものだ。代々この涿郡にすみ、酒を売ったり、ぶたをさいたりするのを商売としてゐる。が、それはおもてむき、もっぱらひろく天下のごうけつとまじわりをむすんでいるものだ。いましがた、おまえさんのような大の男が、ためいきなどついているので、どうしたわけかと、思わず声をかけたのだ。」

劉備はこれにこたえて、

「せっしやは劉備というもので、もとをたせば、漢の王室の一族で、中山靖王劉勝の子孫である。いまこのたてふだを見て、黄巾の賊があばれまわっていることを知り、賊をたいらげたいとは思つたが、とうていそんな力などない。それで、われしらずためいきをもらしていたしだいだ。」

「おお、そんなおれには、金も少々はあるから、それで義兵をつのつたら、なんとかなるだろう。」

劉備はたいそうよろこんで、とにかくこんなところではそうだんもなりかねるからと、さそいあわせて近所の居酒屋へとはいった。そして酒をくみかわしながら、しきりに世のそのことを悲憤慷慨していると、そこへまた、ひとりのおつそ

ろしくせの高い、偉丈夫があらわれた。

「おい、早く酒をくれんかい。おれはこれから町へいって、義勇兵に参加するんだ。」

とわめいている。

劉備がつくつくとながめると、身のたけ九尺ばかり、ひげの長さおよそ二尺（ヤク六十）、おもてはちようど、うれたなつめのように赤く、くちびるは朱をそそいだよう。丹鳳のまなこ（切れ長の目）臥蚕のまゆ（うなふといまゆ）、威風堂々あたりをはらって、なにさま、世のつねの人とは思われない。

劉備は、ていちように酒店の一方の座にむかえ入れて、その姓名をたずねると、

「わしは、河東（山西省の河東）の解良のうまれで、関羽、よび名を雲長というものじゃが、先年、土地の親分が、わしにはじをかかしたので、しゃくにさわって一刀のもとに切りころして、五、六年天下を浪々いたしていたが、このたび黄巾の賊がおこつて、太守が兵士をつのるときいたので、はるばるはせさんじたわけじゃ。」

劉備は、これはたいへんなごうけつがきたわいと、こちらからふたりのところざしをうちあけると、関羽もひじよう